

(十五) アントワネット

犬の吉（きち）に皮膚病があると、亭主が言う。女房が見てみると、腹の右側の毛がまるで抜けてしまい、皮膚が黒ずんで象の皮膚のようにゴワゴワである。よく全身を点検すると、顎の下もだ。

アイヤー。

全然気がつかなかった。ゴメンねえ。

これは獣医に連れて行かねば。

いつもの神社下の獣医は、日中多忙でつかまらない。近所の人に教わった別の獣医はエラク遠かった。

「こうなるまでには、何カ月もかかっていますよ。治るのにも時間かかります」

初老のスマートな女医さんは都会風に標準語でしゃべる。やっぱり茨城でも豚専門の獣医さんとペット専門の獣医さんとは、まるで雰囲気が違う。

「原因は何ですか？」

「ウーン、アレルギーかもしれないし、ホルモンなんかの異常かもしれない。複雑だし、わかりにくいです。原因を確かめるには血液検査で調べないといけないんだけど、保険はないから1回1万円は越すし、薬出して様子見て、また調べて、となると検査も何回かになっちゃいますよね。だから検査はせずに、とりあえず飲み薬と、皮膚を柔らかくするお薬と、薬用シャンプーを出しましょう。飲み薬は3種類、餌に混ぜてそれぞれ朝晩と朝1回やってください。それからこれで毎週2回全身をシャンプーして10分くらいそのままおいといてからゆすいで、柔軟剤はその後ペチペチつけてください」

「え、シャンプーを毎週2回？ ステロイドなんかでパッと治すってわけにはいかないんですか？」

「犬は舐（な）めちゃうからステロイドは使えないんですよ」

「あの、ラップみたいなのを首の周りにつけて、舐められないようにするのは？」

「ああ、あれはかなり犬にストレスがかかるんで、よっぽどでないと思いたくな

いんです」

「週2回もシャンプーして薬つけるなんて、私にできるかなあ」

「それは飼い主さんしだいですけどね。だいたい飼い主さんが一番嫌がるのが室内犬の下痢なんかで、お部屋汚れるでしょ。それに比べると外飼いの動物の皮膚病なんかは、そういえば搔（か）いてたかな、くらいで」

女房、耳が痛い。

まさに、そういえば搔いてたかな、の口である。

「体臭がするんですけど、それも皮膚病のせいですか？」

「え、それはたぶん耳にダニがいるんです。ちょっと見てみましょう。……これはたぶんまちがないですね。耳のあたり、搔いてませんでした？」

「あ……そういえば……たぶん……搔いてました……ハイ」

「じゃ別にお薬出しますね。毎日塗ってやってください」

吉ちゃんゴメンね、長いこと気がつかないで、と無精な女房は謝りながらも、シャンプーは2週間で3回がせいぜいである。

2週間たってもう一度連れて行くと、女医さんは念入りに吉の全身を見た。

「おなかの皮膚は、ずいぶんよくなりましたね。ゴワゴワじゃなくなってる。でも、全身にまだ湿疹がある」

女房、反省したわりには湿疹があったなんて全然気がついていない。

「え？ 湿疹？ どれですか？」

「ほら、ここと、そこと、ほかにもここ。毛が抜けてたのは一部だけど、これは全身の病気ですよ」

アイヤー。

知らなかった。

ゴメン、吉ちゃん、シャンプーの時も老眼鏡かけてよく観察しよう。

1カ月間女房が根気よくシャンプーと薬を続けると、吉の皮膚はずっと柔らかくなって色が薄くなり、まばらに毛も生えてきた。

やっとオーケーである。

長かったあー。

だいたい吉は洋犬の血が入っているらしく眼がパッチリとして、やや毛が長い。どういわけか、特に尻尾と、後ろ足の腿の後ろの方がやけに長く、20センチはある。走り回っていると、フワン、フワン、と派手に揺れる。

女房はそれを見るたび、子どものころ読んだ『三銃士』の挿（さし）絵にあった、近衛兵（このえへい）や貴婦人の帽子についた羽飾りを思い出す。

「吉」なんて純和風な名じゃなくて、アントワネットとか、シャルlotteとか、マリー・クレールとか、舌を噛みそうなフランス名にしてやればよかったと思う。中世ヨーロッパの華やかな宮廷の香りがするではないか。

女房、イタリアに住んだ最後の年は城巡りをしていた。山間部の質実剛健で城塞型の城と、平野部の豪華絢爛で邸宅型の城の2通りがあった。中世に冷暖房はなく、化学繊維の軽くて暖かい服もなく、電灯やガスコンロ、電子レンジもなく、さぞかし不便だったろうと思うが、女房、そのころ流行（はや）った言い方をすれば中世ヨーロッパに「萌え」なのである。

でも飼い犬に長ったらしい名前をつけても、結局省略形の「アン」とか「シャルちゃん」になってしまうだろう。亭主の親戚の犬が「セバ」と呼ばれていて、「洗馬？」と思ったら本名セバスチャンの略だった。なんだか本名と通称とのイメージがてんで違うんですけど。

で、もう1匹の柴犬雑種のジョンは、カタカナ名前よりも、純日本風で男らしい「平蔵」とか「辰（たつ）」とかの名前のほうが、ホントはふさわしいよね。

亭主も女房も時代劇作家の池波正太郎の大ファンである。火付け盗賊改め長谷川平蔵は夫婦のヒーローなのだ。「辰」は平蔵が若い時分かなりヤンチャしていたころの呼び名である。

吉の長い毛は、杉の葉っぱやゴミをくっつける最良の箒（ほうき）である。羽飾りはいいが、ゴミは貧乏くさい。女房はこの際、と吉の毛を短く散髪してやった。貧乏くさい。女房はこの際、と吉の毛を短く散髪してやった。



人相ならぬ犬相がまるで変って、長毛雑種洋犬が、テディベアのぬいぐるみのような可愛らしい顔になってしまった。散歩に連れて行くと、近所の人が、アラ、違う犬よね、前の犬どうしたの？ と聞く。

同じ犬なんですけど。

別人ならぬ別犬。

そして冬になって動物はみんな冬毛になった。吉はまた毛が伸びて、ものすごく厚い「毛皮のコート」を着て暖かそうである。体重はジョンの4分の3しかないのに、「着ぶくれ」でジョンより大きく見える。たぶん祖先は北国の出身だろう。山羊も毛が伸び、一回り大きく、強そうに見える。

お向かいのオシャレなばあ様の兄さんが飼っている、という犬はずいぶん賢くて、主人の言うことをよくきくそう。「おすわり」をさせて餌を置いても、主人が食べていいと言うまではずっとおすわりのまま待ってんのよ、とばあ様が得意げに話す。

よし、ならばジョンもしつけてやろう、と、女房が餌をおいて待たせても、ジョンはいつも通りにすぐ食べようとする。そこで女房が餌をとりあげ、「まだよ、おすわり」と言ってもう一度おすわりをさせて待たせると、ジョンもまたすぐ食べようと尻をあげる。「ダメ、まだいって言ってないでしょ」と女房は再度餌をとりあげる。三度繰り返すと、ジョンは立ったままヨソを向いた。「やってらんねーよ」という顔をしている。

すねたのだ。

そーかそーか、急にヨソの犬の真似をさせよーって無理だよねえ。はい、食べな、と女房は餌皿を置く。おまえはおまえだよねえ。

散歩へ出ると、相変わらずジョンはよく引っ張る。もの好きな夫婦の家へ来て4年目だから、もう7歳の立



派な中年オヤジなのだが、心は永遠の少年である。

春になると新緑が美しい。一番散歩が楽しい時期でもある。女房は思わず一句ひねった。

新緑に誘われ知らず遠歩き

ウン、これは珍しくよくできた。